



マティス《歴史のひとつまーコミュンへの楷梯》神奈川大学図書館蔵

目次

- 図書館が醸す神奈川大学の風格(新図書館長より) 寺尾 道仁 2p
- 『道は、ひらける：タイ研究の50年』
(新入生にすすめる1冊) 野村 親義 3p
- プランゲ文庫と戦後の空白—華僑発行の雑誌について(シリーズ・プランゲ文庫の世界①) 孫 安石 4~5p
- 【連載】図書館のススメ(その1)
(横浜市神奈川図書館) 6p
- 質朴な図書館員の活動
(シリーズ・神奈川大学図書館の歴史を語る! ①) 萩原 富夫 7p
- 図書館からのお知らせ 8p
- 今号の表紙解説 8p
- 編集後記 8p

図書館のコトバ

その①「エツラン」

図書館で「エツラン(閲覧)」というコトバを聞いたことはありませんか?

エツランとは、英語にすると「in library use」。つまり、図書館内で図書館資料を利用することを意味します。よって、例えば「閲覧席」は「館内で図書館資料を利用する席」ということになります(ちなみに閲覧室はreading roomともいいます)。最近では図書館用語に限らず、インターネット用語として、Webブラウザを用いてサイトを見ることを「閲覧」という場合もあります。

※「図書館のコトバ」と題して、よく耳にする図書館用語の解説を毎月お送りする予定です。

図書館が醸す神奈川大学の風格

寺尾 道仁 (図書館長)



私の教科書以外の本との付き合い方は概ね立読み方式であった。小学生のころ学校の図書室の本は少なく瞬く間に読み尽きた。そして古本屋さんの軒先が私にとっての図書館になった。「少年ケニヤ」な

どを手にとって昨日の続きを読む。父が事業に失敗し貧乏していた。なけなしの小遣い銭を握りしめて立読みしているうちに一冊読み終えてしまう。古本屋のおじさんもそれを分かっている。大目に見てくれていたに相違ない。

その後、公立の図書館に足を伸ばすことを覚えた。そこでも立読み方式、その場で読めるだけ読む。借りて帰ると安心してしまい結局ろくに読まずに返却する破目になる。そもそも兄弟6人の大家族の喧騒に読書は相容れなかった。いつの間にか私にとっての図書館は、蔵書利用ではなく喧騒から逃れてじっくりと落ち着ける場、集中して勉強するときの空間になった。特別気合を入れて打ち込もうとする場合には遙々旧国会図書館（現迎賓館）にまで通った。その荘厳な空間は学問することへの畏敬の念と充実感をもたらすものであった。

このような図書館との付き合い方は私の子供たちにも遺伝したようだ。息子は高校を卒業すると米国東海岸の大学への入学を選択した。たまたま国際会議のついでに訪ねると、厳寒に耐えがたいぼろ下宿住まい、最低限の仕送りしかできず親として心が痛んだ。しかし、そこは名門アイビー大学、息子にとっては居心地最高の別天地が用意されていた。彼がその大半の時間

を居場所にしたというキャンパス内のライブラリー十箇所ほどを半日がかりで連れまわされた。いずれもノーベル賞受賞者などの名が刻まれた荘厳な施設である。息子はこのライブラリーではこの窓辺で、このライブラリーではあの重厚な書籍に囲まれたデスクでと、どのライブラリーにも深い愛着を滲ませていた。

娘も高校の先生のおだてに乗って国際コミュニケーション力を高める留学を希望していた。しかし、それが経済的に無理と悟り、授業などが英語で展開される都内の大学を選んだ。娘の大学での居場所も、また、図書館であった。1 Semester 期間予約制の専用デスクで毎晩閉館時間十時まで落ち着いて勉強できる学生生活を送った。今もこの図書館での充実した時間と空間が懐かしいという。それは学生満足度がトップにランクされる大学の一面を物語っている。

本学の図書館もまた、キャンパスの重心に位置して落ち着いた木立に囲まれるカルチャータン、知の府としての神奈川大学の風格と好イメージを醸している。今や学生と卒業生にとって本学学生である（あった）ことのプライド、本学への愛着心と満足度に欠かせない価値である。それを大切にしていきたい。

(てらお・みちひと 工学部建築学科教授)

—— 寺尾先生プロフィール ——

研究分野：建築環境
出身地：東京新宿生まれの新宿育ち
趣味：スキー、テニス、ウィンドウショッピング、立ち読み(買ってしまおうと読まないの)
尊敬する人：研究者－ヘルムホルツ(科学・医学)、技術者－本田宗一郎
好きな音楽：古いJazz(特にベニーグッドマンのクラリネットやデュークエリントンのサウンド)
好きな食物：はまぐり、うるめいわし、白桃、ショートケーキ
好きな国：ヨーロッパ諸国(特にドイツ)

「新入生にすすめる1冊」ということで、経済学部の野村先生に本をご推薦いただきました。
図書館にもありますので、是非手に取ってみてください。

新入生にすすめる1冊 『道は、ひらける：タイ研究の50年』

石井米雄著 めこん 2003年
B289-1371 (横浜)

野村 親義

「グローバル化」という言葉が巷を覆うようになって久しい。「地球化」とも訳し得るこの言葉が日常語となった背景に、国境・地域を越えたヒト・モノ・カネ・ジョウホウの行き来が、地球規模で活発化し、地球各地の事物が、私たちの日常に少なからぬ影響を与えるようになってきたことがある。そしてこの活発な往来を根拠に、国・地域に固有な社会的制度は、世界中が急速に導入を推し進めている地球画一標準、いわゆるグローバル標準に早急に置き換えられるべきである、というあまりに極端な意見まで喧伝されるようになってきた。

こうした極端な見解の疑わしさは、実際に自分が「国境を越えたヒト」になってみるとよくわかる。国境を越えたヒトが、国境を越えた先で出くわすのは、その多くが、グローバル標準化された社会制度などでは決してなく、国境の先にある国・地域が長い歴史を通じ培ってきたその国・地域に固有な社会的制度である。さらに、国境の向こうに住んでいるヒトにとって、国境を越えてやってきたヒトである私は、あくまでよその国・地域の社会的制度を背負ったヒトでしかない。(もちろん私に対する認識は、どこそこの国・地域の人らしい/らしくない、といったかたちで次第に調整されていく。ときには、私に対する認識をもとに、私の国・地域に対する認識が再構築されることもある。)

グローバルな世の中になるとというのは、結局のところ、異なる国・地域のヒト・モノ・カネ・ジョウホウの接触が格段に増えること、に他ならない。そしてこのグローバルな世の中から皆が恩恵を得るためには、異なる国・地域のヒトヒトが、互恵的に接触できる社会的制度の構築が是非とも必要となる。

こうした制度の構築にとって重要な要因の一つに、国境を越えた先の国・地域の社会的制度に関する多面的で深い理解がある。接触する相手への十分な理解なしに、相手の国・地域との良好な互恵関係を醸成する社会的制度の構築は不可能であろう。

では、どうすれば国境を越えた先の国・地域に関する多面的な理解を深めることができるのか。『道は、ひらける。タイ研究の50年』(石井米雄著)は、一人の地域研究者の半生を通じ、私たちに一つの指針を示してくれる。

本書は、半世紀にわたり、タイと日本の相互理解

に尽力してきた石井米雄先生(現・人間文化研究機構・機構長)の自叙伝である。第一級の地域研究者によるこの自叙伝は、先生が20歳前後のころ、類まれな好奇心と忍耐力で東西の語学を習得されていたころの話から始まる。特にタイ語の習得に強い関心をもたれた石井先生は、その後(1957年)、外務省職員としてタイに留学され、現地でタイ語のみならずタイ全般にわたる理解を、溢れる愛情とともに、深められる。そして先生は、その理解をもとに、タイを訪問した池田隼人日本首相とサリット・タイ首相の交渉を補佐し、後の日・タイ関係発展の礎となる「特別円問題解決」(1961年)に大きく貢献される。その後京都大学東南アジア研究センターに移籍され、世界的な地域研究の一大中心機関の創設に尽力される。タイの知友に義理があるからタイから離れられない、と言いきる先生の半生は、私たちが国境を越えた先の国・地域との付き合い方を考える際、一つの指針を示してくれる。

海の向こうに実在するアジアを知らずに「亜細亜」を定義し、自らが定義した亜細亜を金科玉条として近隣諸国に進出した過去の日本。「亜細亜」に翻弄された過去の日本の歴史を痛いほど自覚したもののなかに、いまだ日本が途上国であった1950・60年代、溢れる好奇心と深い愛情を胸にアジア各地の細部に身を置き、アジアに対する理解を深めたひとびとがいた。社会的制度の地球画一標準化の標榜に代表される、グローバル化の名のもと国境の先の国・地域に対する多面的で深い理解を軽視しかねない言葉が巷にあふれる今こそ、石井先生をはじめとするこうしたひとびとの真摯な声に耳を傾ける時であろう。

類似の文献として、たとえば、桜井由躬雄『緑色の野帖：東南アジアの歴史を歩く』めこん、1997

中里成章「大都市カルカッタからみたインド」、『いまアジアを考える III』、『三省堂選書』、131巻、1986年、東京、三省堂、pp. 27～69。がある。

(のむら・ちかよし 経済学部准教授)



プランゲ文庫と戦後の空白—華僑発行の雑誌について

孫 安石

戦後という空間—混乱と対立の中で

第二次世界大戦が終わった1945年から朝鮮戦争が勃発する1950年までの5年の間、日本、中国、韓国の東アジア3国は政治、経済、社会などあらゆる方面で極めて混乱した局面をむかえていた。日本は連合軍総司令部（GHQ）の占領のもとで敗戦の貧困を乗り越えなければならなかったし、中国は抗日戦争の勝利の喜びも東の間で終わり、国民党と共産党の間で内戦が勃発した。また、朝鮮半島では本来であれば植民地からの解放を迎え、自らの意思によって新たな国づくりが始まるはずであったが、冷戦体制のもとで左派と右派の対立が激化し、結局、南北が分断する結果を招いてしまったのである。このように戦後という空間は、新たな秩序を目指し、混乱と対立が繰り返された時期であったといえる。

2005年から学術振興会の科研費「東アジアメディア産業研究」（課題番号:17310148、代表：孫安石）の支援を得て、1945年の8月と9月を前後した時期の日本、中国、韓国のそれぞれの国で終戦記念日がどのような経緯で決定されたのかを調べる機会があった。その中で確認できたことは、日本は1945年8月10日のポツダム宣言の受諾から9月2日のミズリー号での降伏調印式に至るまで極めて周到に敗戦を迎える準備をしていた、という事実である（佐藤卓己・孫安石編『東アジアの終戦記念日』、ちくま新書、2007年を参照）。

例えば、外務省外交史料館所蔵の「終戦処理一般事項」（請求番号A-0090、戦後公開の部）によれば、日本政府は1945年8月22日には内閣総理大臣の他、主な閣僚で構成される「終戦処理会議」を設置し、その下に大本営及び政府の関係部署による「終戦事務連絡委員会」を組織している。この終戦処理会議の決定にもとづき、8月24日には「大陸方面の情勢に対する帝国の措置に関する件」という報告が出されている。

それによれば日本側は、

「一、 在大陸帝国軍の一挙武装解除は全く不可能なることを联合国に通報し、之が実情を知悉せしめ現地の実情に即応せる武装解除に関する我方の手段を認めしむると共に、要すれば米・英軍の支那大陸進駐を考慮せしめ、治安を確立する如く指導す。

「二、 大陸方面の情勢を広く世界に報道し、其の正義人道観に訴え帝国の正統なる要求を理解せしむ」という方針であったというからまだまだ戦争の正当性をめぐっても联合国側と争う考えであったことを窺うことができる。

プランゲ文庫と戦後の日本

しかし、このような日本側の対応は国家や政治レベ

ルの話で、敗戦を迎えた多くの一般市民は、第一に戦争がおわったという虚脱感を克服しなければならなかった。当時の日本人が経験した戦争と敗戦の体験については、多くの文学作品や新聞雑誌などがさまざまに紹介している。ところで、この敗戦後の日本の動きを窺える資料の中でとくに、注目に値するのが、アメリカ合衆国メリーランド大学マッケルデン図書館が所蔵するプランゲ文庫である。プランゲ文庫とは、第2次世界大戦後、日本を占領した連合軍総司令部が占領政策の一環として行ったメディア検閲の結果として民間検閲局（CCD）に保管されていた資料を指している。



【図1】未整理状態のプランゲ文庫（文生書院提供）

日本全国を東京、大阪、福岡の3つの地区に分けて行われた検閲は1949年に終了し、これらの資料はメリーランド大学教授を兼任していたGHQ参謀II部戦史室に勤務していたプランゲ博士に引き取られ、「ゴードン W. プランゲ文庫」と命名されたのである。

プランゲ文庫の貴重な価値は、この資料を通して联合国による新聞雑誌の検閲の実態を知ることができる点は勿論、敗戦から4年間の日本社会の変化を当時の出版物によって克明に追跡できる点にある。しかし、このプランゲ文庫がアメリカに保存されていたことで日本ではなかなか利用に不便であった。ところが、2001年から関係各所の努力でプランゲ文庫の資料がマイクロフィルム化され、研究者の利用が可能になった。プランゲ文庫は新聞18,047タイトル、雑誌13,743タイトル、図書とパンフレット約71,000タイトル、報道写真約10,000枚、ポスター90枚、地図約640枚によって構成されているが、神奈川大学図書館はそのうちの雑誌部門のすべてを所蔵しているのである。

華僑発行の雑誌—『僑声』と『僑風』

戦後の日本国内では様々な理由で日本に滞在していた朝鮮と台湾の人々によって多くの新聞や雑誌が発行された。小林聡明『在日朝鮮人のメディア空間—GHQ

占領期における新聞発行と其のダイナミズム』(風響社、2007年)によれば、敗戦後の日本で朝鮮人によって編纂された出版物は新聞100タイトル以上、雑誌20タイトル以上を数えるという。ところが、日本に滞在していた華僑たちも、自国の国民に対する文化や教育方面における情報不足を補うために日本語や中国語などによる様々な雑誌を出版した。

その中の一つが大阪在住の華僑を中心として刊行された『僑風』(1947年3月、創刊号、中国語)である。

ブランゲ文庫が所蔵する新聞雑誌と戦後日本研究の重要性は以上の簡単な解説だけでも理解していただけたと思うが、ここでは中国の華僑によって発行された雑誌『僑声』と『僑風』について、若干内容を紹介したい。



【図2】『僑風』と『僑声』の表紙
(神奈川大学図書館所蔵のブランゲ文庫資料より)

創刊号の発刊辞によれば、「国には国風が、学校には校風というものがあり、国風と学風の涵養は一朝一夕にはならず、国風と校風の優劣がすべての国家と学校の優劣を決めるのである。しかし、祖国を遠く離れ、学校を卒業してしまった我々華僑は、長い間、無風地帯の索漠なところに置かれている」と華僑が置かれた劣悪な文化環境について述べた後、「華僑の文化向上と修養、そして、愛国精神の啓蒙を『僑風』の宗旨とする旨が打ち出されている。

また、大阪華僑聯合総会の学務部長を務める徐新元による論説「關於僑風の創刊」においても華僑の教育問題が中心的に論じられ、「日本が降伏した当時、台湾の中国籍華僑は祖国の言語を学ぶことを急務と思い、すこぶる勢いで勉強をしたが、あとになっては日本語を使うのみで、戦後1年が経過した今日まで中国語ができない人はまだ多い。これは当然改善しなければならない。」として、中国語教育の必要性を訴えている。また、楊昌輝の「戦後華僑之展望」は戦後の華僑の地位を政治、経済、文化教育の方面から論じた上、16項目に渡る政策提言を行っている。たとえば、華僑人口調査の実施、中央華僑銀行の設立、華僑文化の発信の中心になる機関の設置、華僑福利事業の充実などの提案は、現在でも検討を要する重要な指摘を含んでいるものと思われる。

『僑風』が文化と教育に注目していたことに比べれば、『僑声』はそれとはやや異なる立場で編纂された

雑誌である。ブランゲ文庫が所蔵する『僑声』第9号(旬刊)によれば、同雑誌は中華民国大阪華僑聯合会文化部によって発行され、「三民主義講座」や「中国国民党史」など国民党の政治的立場を反映する記事を連載するほか、中国語の会話や日本の東京裁判や中国の漢奸裁判の速報を掲載している。

とくに、『僑声』第11号(1946年8月)は渋谷事件に関連する大阪や京都の華僑の動静を載せている点、注目されよう。「渋谷事件」とは1946年7月19日に東京渋谷の闇市の利権を巡って日本人の暴力団と台湾人露天商との間で起きた武力衝突事件であるが、後に日本の警察権力が戦勝国の中華民国・台湾人の取り締まりができるか、という国家権力を巻き込んだ重大問題へと発展する。この渋谷事件については、何義麟「戦後台湾における海外ニュースの報道と規制」(『現代台湾研究』第32号、2007年)がその概略を紹介しており、これ以上は触れないが、当時の台湾は勿論、中国大陸の各地からも台湾人救援活動という側面から渋谷事件を活発に報道していたことは注目に値する。

『僑声』はさらに、渋谷事件発生1ヶ月後には京都や大阪などに在留する華僑によって関西聯合委員会が開催され、東京の対策委員会に代表を派遣する他、義捐金を集めるなどの対策が検討されたことを記している。華僑側からみれば、日本側の対応は「経済争奪戦と華僑撲滅行為である。後者が根本問題ではないか、と思う」というもので、日本側の責任追及と再発防止の約束、そして、華僑の生命と財産の保護を要求して聯合國側にも交渉を持ちかけていた様子をうかがうことができる。

戦後の日本社会を克明に映し出すブランゲ文庫の重要性についてはすでに多くの研究者が指摘してきた通りであるが、なかでも、早稲田大学の山本武利教授を代表とする占領期新聞・雑誌記事情報データベース化プロジェクト委員会の活動は注目に値する。すでに一部の成果は、20世紀メディア研究所の運営によるホームページ(<http://prangedb.kicx.jp/login>)に一般公開され、200万件にいたる莫大な新聞記事レコードの検索が可能になっている。

神奈川大学でも、この貴重なブランゲ文庫の研究を進めるべく2008年3月には「人文学研究所」の中に共同研究グループが結成され、神奈川大学図書館が所蔵するブランゲ文庫の雑誌部門の検討を始めようとしている。ブランゲ文庫を取り上げた今後の研究成果については、また、この紙面を借りて報告したい。

(そん・あんそく 外国語学部中国語学科教授)

孫先生が紹介されている通り、神奈川大学図書館では、ブランゲ文庫のマイクロ資料を所蔵しています。閲覧ご希望の場合は、横浜図書館地下1階視聴覚カウンターまでお越しください。なお、この「ブランゲ文庫の世界」は連載でお送りする予定です。

図書館のススメ (その1)

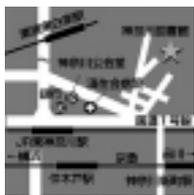
横浜市神奈川図書館



今号から「図書館のススメ」と題して、みなさんの身近にある公共図書館・大学図書館等、神奈川大学図書館以外の使える図書館を連載でご紹介していきます。

第1回目の今回は、東白楽駅近くにある公共図書館「横浜市神奈川図書館」をご紹介します。

横浜市には現在18館の市立図書館があります。中でも神奈川図書館は神奈川大学から一番近くにある図書館です。



神奈川大学から歩いて行く
と20分強かかりますが、歩いて行ける散歩コースです。東白楽駅、京浜急行仲木戸駅、JR東神奈川駅からですと各10分程度の徒歩圏内です。神奈川図書館は老人福祉施設との

複合施設として、1987年に市内12館目の図書館としてオープンしています。

館内は1フロアで、こじんまりとした使いやすい図書館です。平日の館内は割と落ち着いていますが、週末ともなると家族連れが大勢来ようようです。10代の利用者向けコーナー（ティーンズコーナー）に力を入れているようで、漫画もたくさん所蔵しています（ただし、書庫に入っているものが大半です。カウンターで請求して出してもらうこととなります）。視聴覚資料は所蔵していません（横浜市では、視聴覚資料は中央図書館でのみ所蔵しています）。

図書館の入口には「リサイクル文庫」というコー

ナーがあります。これは自分が不要となった図書をそのコーナーに持って来て、他の必要な人が自由に持っていけるようにという配慮で設置されたそうです。

この「リサイクル文庫」とともに神奈川図書館のウリになっているのが、神奈川宿に関する地域資料です。神奈川宿は東海道五十三次の品川、川崎に続く宿場で、今の神奈川県横浜市神奈川区神奈川本町付近（京浜急行仲木戸駅と神奈川駅の間）にありました。今も近くに浦島町という地名がありますが、神奈川宿には「浦島伝説」があり、それにちなんだ浦島太郎のコレクションを神奈川図書館では積極的に収集しています。

神奈川図書館の職員の方に、神大生への要望を伺ったところ「借りた本の返却期限は守ってください」とのことでした。

ルールを守って是非一度、神奈川図書館に足を運んでみてください。



神奈川図書館利用案内

開館時間

火～金曜	9：30～19：00
土日・祝日・月曜	9：30～17：00
12月28日	9：30～17：00
1月4日	12：00～17：00

休館日

施設点検（月1回）
年末年始（12月29日～1月3日）
特別整理日

利用者登録

市内在住、在勤・在学者であれば、登録が可能です（横浜市の図書館すべて）

貸出

6冊2週間
※返却は横浜市内の市立図書館であればどこでも可

所在地

〒221-0063
横浜市神奈川区立町20-1
Tel 045-434-4339

詳細は横浜市立図書館のサイトを参照ください。
<http://www.city.yokohama.jp/me/kyoiku/library/>

現図書館である15号館は、神奈川大学創立50周年記念として建設されました。今年は神奈川大学創立80周年。この図書館も30周年を向かえようとしています。この節目の年に、今までの図書館の歴史を振り返り、皆様にご紹介していきたいと思います。という訳で、今号より「図書館の歴史を語る！」と題し、シリーズでそれぞれの時代に携わった図書館職員よりその当時の状況を語っていただきます。第1回目は新図書館になる前の時代について、既に退職された萩原氏に執筆いただきました。

【シリーズ】

神奈川大学図書館の歴史を語る！①

質朴な図書館員の活動 ——70年代閉架式図書館の一側面——

萩原 富夫

1973年に私が神奈川大学図書館に就職した当時、図書館の蔵書数は22万冊に達し、この数は国公私4年制大学410校中、国立が80校もある中で87位にランクされていた。その後、80年には29万9千冊と順調に伸び、更に、90年には56万9千冊に達し、歴史のある他大学図書館と互角に収集拡大している(数値はいずれもその年度の『日本の図書館』による)。

80年の現図書館竣工とその後の10年の歩みは、それまでの二倍に近い数に拡大する。この拡大は、大学の学部・学科の増設によるものでもあるが、それを支えた図書館活動の成長・発展の結果を示すものでもあった。その地ならしとなる70年代の質朴な図書館員活動の一端がそれを物語っている。

6号館の階段を2階にのぼり旧図書館の玄関を入ると正面に掲示板があった。その左手のドアが事務室入口。右手に行くとカードボックスが2列並び、その左側に利用案内・閲覧・貸出のカウンターがある。それに沿って奥に進むと天井の高い閲覧室があった。

22万冊の図書と4千タイトルの雑誌は直接学生達には見えない。全てが利用者の居るフロアの下、すなわち1階と地下1階を合わせた2層の書庫にあり、その上に和書、下に洋書が置かれ、既に飽和状態で本が床に溢れていた。学生が直接手に取って見ることできかない、典型的な閉架式図書館だった。

図書館員全ての意識がこの閉架式問題に集中していた。利用者と図書を有効に結びつける方途は何か、という問題が常に頭にあった。図書が購入される。その図書に利用者が必ず行き着くことのできるカード目録を作製する。学生は見えない書庫の図書から所在を示すカードボックス内のカード目録だけを頼りに必要な図書を探索する。それをどうサポートするかだ。

有効に結びつける方法が図書館活動としての生活の知恵を媒介とした、利用システムの内に自然に作られていった。そのシステムを担う活動に魂を吹き込むべき専門職を志す館員による仕事の絶えざる深耕とそれを支える自己研鑽があった。

現在の『図書館だより』には前身がある。70年代初め、館員の自主的な「がり版」刷りによる、利用者と館員を結びつけるコミュニケーション版である。

利用者の声と応答する館員。図書の探し方、目録の利用法、学生の図書館への要望、私語の多い閲覧室の苦情等への丁寧な説明。各学科の授業用テキストに図書の所在場所記号が付されたリスト、更に、不提供図書の補充と類書リスト、利用案内を含めたさまざまな図書館機能等の紹介記事が手作りのがり版刷りで発行されていた。これが大いに学生と図書館との仲

立ちの役割を果たしたのである。

新入生への図書館利用のガイダンスではカード目録を使っていかに図書を探すかに説明の主眼が置かれていた。探索に不案内な学生がカードボックスにいる場合、館員の誰でもが即座に対応可能なようにしていた。日々作製されてくる新しいカード目録のボックスへの収納作業が毎朝全館員によって行なわれていた。配列間違えの防止のため、必要に応じてカード配列の研修が組み込まれた。

というのは、カード目録の記入の形式が国際的な標準に基づくものであり、カード配列は厳密に規定されていたからである。カード目録を作製する館員は、その手引書である『国際標準書誌記述』なる規則類を何度も読まされ、公共圏の存在と意味が見えてきたと言うほどであった。図書の分類も学問体系を標準規則『日本十進分類法』に基づいて記号で表現する。例えば、近代経済学は「331.7」の記号を付与するように。慣れていても学問体系を視野に入れて、毎日、一人で何十冊もの図書に記号を付すのは至難の業である。

学生の図書請求には、一秒でも早く書庫から取出して学生に渡したいという気持ちがあった。そのため、館員は分類された図書の書架上の位置を反芻して覚えた。新たに購入した図書、日々返却される利用後の図書は全館員が書庫に配架した。書架が飽和状態のため常に棚上を移動させ、別置しても即座に探せることが配架作業の条件であった。しかし、空調のない書庫で毎年夏、洋書の背に生えたカビを科学雑巾を使って取る作業には閉口した。

手狭になった書庫の奥の狭い壁際に、裸電球が天井から吊るされた机が3箇所置かれていた。就業時間が終わると、ある館員達が毎日ここに来て勉強していたのを思い出す。一般的に当時の図書館員は吹き溜り集団と言われて揶揄されていた。

館員の中には、私大図書館協会研究会に参加して情報をもたらす図書館専門人、俳人・詩人、文学・社会学・音楽・山等の愛好家、6か国語を操る達人が含まれ、活気の在る関係模様でもあった。行き過ぎの多い多感な若い館員に対し、包容力豊かな管理職の、「同ぜずして和す」の掛け声もあって、仕事はもとより遊行に至るまで、課を超えて厚みのある時間を共有した。生が生を感じる70年代を過ごした以上の経験によって、80年に開架図書室と自由な閲覧空間を軸とする手作りの現図書館を建て、一館を超えて図書館活動を担う質を持つ図書館に至ったのである。

(はぎわら・とみお)

神奈川大学国際経営研究所客員研究員)

図書館からのお知らせ

◎ IC対応の入館ゲートを設置しました

前号でお知らせしましたとおり、横浜図書館・平塚図書館ともにIC対応の入館ゲートを設置しました。今までは学生証等を受付で提示して入館していただきましたが、



今後はゲートのリーダー部分にICもしくは磁気を読み込ませて入館してください。

学生証等がないとゲートを通過できませんので、今後図書館にお越しの際は、必ず学生証および身分証を持参してください。

◎ 2008年版の「図書館利用の手引き」

「情報リテラシーテキスト」を発行しました

毎年発行しています、「図書館利用の手引き」および「情報リテラシーテキスト」の2008年版ができました。図書館で配布していますので是非利用の際にご活用ください。

◎ 朝日新聞データベースが「聞蔵Ⅱビジュアル」にパワーアップ!!

朝日新聞記事検索データベース「聞蔵」が、4月1日より「聞蔵Ⅱ」にバージョンアップしました。特徴

としては、1945年以降の記事が検索可能となり、また2005年11月以降の記事については紙面イメージ(PDFファイル)での閲覧が可能です。是非ご利用ください。

◎ グループ情報検索室のご案内

図書館2階に、グループでインターネットを利用しながら学習できる部屋として、パソコンを10台設置したグループ情報閲覧室があります。クラス・ゼミ単位でのグループ学習(4~10名)にお役立てください。 ※事前予約制



受付場所：2階レファレンスカウンター

受付時間：9:00~19:30

(休業期間 9:30~17:30)

利用時間：[平日] 9:00~19:30(授業期間)

9:30~17:30(休業期間)

[土曜] 9:00~16:00

予約受付：利用日の1週間前から前日までに2コマまで申し込みできます

※ 詳細はレファレンスカウンターまで

今号の表紙

Mathis,F.

《Une Page d' Histoire》

マトイス

《歴史のひとこまーコミュニケーションへの階段》

多色刷り石版画 52.9×35.5cm

神奈川大学図書館所蔵 [1871]

パリ・コミュニケーション諷刺画の1枚。

ルイ・フィリップ王の上にナポレオン三世、その上にティエール、一番上にコミュニケーションの旗をなびかせた共和国の象徴マリアンヌ。

マリアンヌとは…

フランス共和国を擬人化した人物像のこと。

※今後「図書館だより」の表紙に、パリ・コミュニケーション諷刺画等、神奈川大学図書館所蔵の貴重書を掲載していく予定です。

編集後記

新入生のみなさん、

ご入学おめでとうございます!

今号の「図書館だより」は、いかがでしたでしょうか?今号より、レイアウトおよび構成の見直しを始めました。なるべくみなさんが手に取ってくれるように、そして興味を持ってもらえるように…と思いながら編集方針を模索しています。その第1歩が今号になります。ご協力、ご執筆いただきました先生方、本当にありがとうございました。

図書館が発行している刊行物には、この「図書館だより」の他にも「情報リテラシーテキスト」「図書館e通信」等があります。リテラシーテキストが情報教育を目的としたテキスト、e通信が図書館で提供している各種データベースの利用促進を目的としているのに対し、この「図書館だより」は図書館の活動を知ってもらう広報的な目的とともに、図書の見聞、読み物としても成り立つことを目的に編集しています。

1973年4月15日に「図書館だより」第1号が発行されてから、早35年(1号はB4版1枚の片面刷でした)。今後みなさまのお役に立つ、様々な情報を提供できるような「図書館だより」でありたいと思っています。感想等々お待ちしております!

(yoshiba)